慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第107回医師国家試験

新卒合格率 2年連続100%ならず

平成25年2月9日から11日にかけて実施された第107回医師国家試験の合格発表が、3月19日に厚生労働省より行われた。

第107回医師国家試験の受験者総数は8569名、合格者は7696名で全体の合格率は89・8%であった。昨年の90・2%より減少し、合格率が2年ぶりに9割を下回った。男女別合格数は男5180名、女2516名と、合格者のうち32・7%を女性が占めた。合格基準は一般問題139点以上（200点満点）、臨床問題427点以上（597点満点）、必修問題160点以上（200点満点）、禁忌肢問題選択数3問以下とおよそ昨年並みであった。

ここ最近の傾向として、問題文中に「現時点の」という語句が入るものが多いということが挙げられる。研修医としての最初の行動を意識した設問なのだろう。他にも臨床実習を重視する問題や、診断を確実につけさせる問題が増加している。医学部教育の中で単なる暗記による知識だけではなく、医師として働くための考え方を身につけているかを問う傾向にあると言えよう。

本塾医学部では総計100名が受験し95名が合格（95・0%）、うち新卒は97名が受験し、95名が合格（97・9%）した。昨年に続く新卒合格率100%は惜しくも達成されなかった。しかしながら新卒合格率は全国第9位というすばらしい成績であり、92回生（現6年生）の努力とその成果は驚嘆に値する。

この結果は92回生国家試験対策委員によるきめ細やかな対策が実を結んだものだ。早くから前年の国家試験の傾向を踏まえた説明会を行い、積極的な模試受験の推奨など計画的な学習を促した。時には委員が直接他の学生とともに勉強し、進捗度を量る姿も見られた。またこのような委員達の活動により、学年全体のモチベーションも上がり合格を目指す雰囲気が強くなったのであろう。

重圧をはねのけ難関を通過した今年の92回生の結果は非常に誇らしいものである。4月より医師になる95名に敬意を表し、本学の名に相応しい活躍を期待したい。

（5年　石井斉宜）

第107回医師国家試験、新卒合格率

順位	大学名	受験者数	合格者数/合格率(%)
1	埼玉医科大学	99	99/100.0
1	名古屋市立大学	74	74/100.0
3	日本大学医学部	114	113/99.1
4	自治医科大学	105	104/99.0
4	東京大学医学部	99	98/99.0
6	順天堂大学医学部	94	93/98.9
6	東京慈恵会医科大学	90	89/98.9
8	福島県立医科大学	80	79/98.9
9	慶應義塾大学	97	95/97.9
9	産業医科大学	94	92/97.9
9	金沢大学医学部	94	92/97.9

平成24年度卒業式

医学部97名が社会へと羽ばたく

式典の様子

平成24年度卒業式が3月22日、日吉記念館で行われた。卒業生や彼らを祝福する家族で賑わう中、式典は午前10時定刻に開始された。

開式の辞より始まった式典では、まず長谷山彰常任理事による学事報告がなされ、各学部の卒業生数および表彰者数が読み上げられた。卒業生数は全学部で6390名、うち医学部は97名であった。次に各学部の代表者への学位記授与が行われ、医学部からは山本一希君が受領代表となった。続いての各種表彰では、まず大学表彰規程による表彰、すなわち医学部首席として青山純也君が表彰を受けた。次に小泉体育努力賞として、医学部から端艇部22名、水泳部15名、競走部4名、空手部1名、ゴルフ部10名が表彰された。最後に小泉体育奨励賞や塾長賞の表彰が行われた。

各種表彰の終了後、清家篤塾長が式辞を述べた。塾長は、卒業生の門出を祝うとともに、卒業後も半学半教の精神を持ち続けることの必要性について説いた。また、福澤先生が重んじた、自らの頭で物事を考えるプロセスや状況を踏まえて適切な選択・判断ができる能力、すなわち実学や公知の礎は既に培われていると強調した。更に、先生の「学者は国の奴雁たれ」という言葉を引用し、時世に流されず現状を冷静に分析し、国の将来に何が必要かをよく見極めてほしいと締めくくった。

次いで、株式会社産業経済新聞社・取締役会長の清原武彦氏から塾員代表として祝辞があった。清原氏は「先導者」と「気品」という2つのキーワードを挙げ、異端を恐れずチャレンジ精神を持ち、世のために貢献してほしいと卒業生にエールを送った。これに続き、商学部の岸本由紀君が在学生代表で送辞を述べた後、卒業生代表として薬学部の運見由佳君が登壇し社会に出る上での決意を語った。

式の結びには、会場にいる塾職員と卒業生など、慶應社中による塾歌斉唱が行われた。同会場では引き続いて2013年三田会結成式が行われ、無事閉式となった。

（4年　森田篤帆）

謝恩会開催

本年度の謝恩会が3月23日、帝国ホテル富士の間において執り行われた。今年度の卒業生である92回生が参列し、会は終始和やかな雰囲気で進行した。

謝恩会は18時に開場し、来賓の挨拶、卒業生紹介、卒業記念品授与、寄贈品贈呈、謝恩会委員挨拶、若き血斉唱と続いた。

清家篤塾長は挨拶にて、「理論と臨床という型を習得し戦力となってゆくが、即戦力というだけでは十分ではない」と述べ、非定型的知的産業である医師という職業において、自ら考え、時々刻々と変わってゆく環境に対応していくことがいかに大切かを訴えかけた。

末松誠医学部長は、「震災が起こった際、当時の体育会幹部であった92回生は実に迅速に判断、行動し、速やかに安全確認を行ってくれた」と賞辞を述べるとともに、研修という言葉の意味をしっかりと噛みしめて2年間を過ごしてほしいと強く語った。

比企能樹三四会会長は、「こんなに多くの方々が三四会に加わってくれて嬉しい」と新しく三四会の正会員となる92回生に対し歓迎の言葉を述べた。

岡野栄之医学研究科委員長は挨拶のなかで、「今日の日の感激を一生忘れないでほしい」と語るとともに、医師の在り方を自らの専門である幹細胞に喩え、様々な場所で武者修行をすることが、また次の世代を担う医師を育てることの大切さを説いた。

武田純三病院長は、「医師というのはどこに行っても切り離せない職業であり、様々な義務を背負わなければならない」と述べて来賓挨拶を締めくくるとともに、自ら乾杯の音頭をとった。

92回生が卒業後も更なる飛躍を遂げ社会の先導者となることを願うとともに、我々在校生も義塾で学ぶ者としての自覚をより一層強く持ち、世界の医学の進歩に寄与できるように研鑽を積む必要があると強く感じた。

（5年　石川貴大）

晴れ姿の92回生

謝恩会委員長の吉本憲史君

特別対談

予防医学につながる加齢医学の最先端

アメリカ国立加齢研究所 ルイージ・フェルッチ氏
慶應義塾大学 医学部長 末松　誠

老年学の中心的研究者であるアメリカ国立加齢研究所のルイージ・フェルッチ先生と、末松誠医学部長による特別対談です。慶應大学医学部では健康科学プロジェクトを開始するなど、近年、予防医学や加齢医学にも積極的に取り組んでいます。そこで、「予防医学」や「老年医学」をキーワードに、日米の保険制度の違いや栄養指導の重要性など語り合ってもらいました。

【対談は4面に掲載】

卒業生に贈る言葉

2013年度慶應義塾大学医学部卒業生に贈る ～恕（じょ）して医をなす～

三四会会長　比企　能樹（外37回）

慶應義塾大学医学部第92回生の諸君、ご卒業おめでとうございます。

国家試験が待っているので気を引き締めて居ると思いますが、それが終われば諸君はいよいよ「先生」と呼ばれる様になります。塾に於いて「先生」は福澤先生のみですが、MDになると世間の人は諸君を「先生」と呼びますから、そう呼ばれるに相応しい人となって頂きたいと思います。

人は何かを始める時に、先ず何をするでしょう。例えばスポーツや趣味を始めるに当たって道具と着衣などを用意しますが、人によって何の仕度もせず取り敢えずやってみる人と、すべて完全に整えてから始める人がいます。

諸君の場合、医師をスタートするに当たりこれまで6年間に様々な支度を万全に整え、白衣もステトスコープも既に携え、後は実践あるのみです。そこで聞きたいのは「医の心」が整っていますか？という事です。つまり医師として、病む人の苦しみを共に解決しようという心構えと、環境の異なるそれぞれの人と正面から向き合って話をし、それを理解する覚悟ができているかどうかという問いです。新人医師の諸君のみならず、ベテランの医師もまた、この問いを絶えず自問自答して医療に生きて貰いたいと、日頃から願っています。

今から諸君は、その優秀な頭脳と最新の機器を駆使して病を突きとめ、それを治療することが求められます。昨年から私は機会ある毎に「恕（おもいやり）」という言葉を紹介してきましたが、福澤先生も「己の心のごとく、ひとの心を思いやる」という意味でこの「恕」という言葉を使われました。どんなに医療技術が素晴らしく、医の学問が抜きん出ていても、この「恕」なくしては真の医師とは申せません。

日本の現代生活は物質的に整えられていますが、欠如しているのは「心」であると、この所諸賢人たちが気付き始めました。人と人とのつながり、他人への思いやり、痛みを分かち合うことを、一昨年の3・11大災害で学びました。そしてそれは「恕」が全てにおいて、国際的にも必要なことと認識できます。

さて諸君は、これから国際社会にも打って出るでしょうが、医学と言う強い武器をもって世界に羽ばたき、積極的に力ではなく、頭脳と心で勝負して下さい。「慶應義塾ここにあり」と世界で認めさせるような医学と医術を磨いて頂きたいと、諸君の門出に願う次第であります。

考えよう、今、求められる医師像を

慶應義塾 常任理事　戸山　芳昭（整54回）

92回生の皆さん、ご卒業誠におめでとうございます。楽しい学生時代を振り返り、その思い出を大切にして、いよいよ医師としての第一歩を踏み出します。これからの2年間、それぞれの初期臨床研修施設において実際の医療を学び、より多くの経験を積み、医師としての基本を習得し、特に患者さんから求められているものは何か、医師として何をすべきか、何が必要なのかをしっかり考え、身に付け、2年後には一人の医師として大きくなった姿を是非見せて下さい。その日を楽しみに待っております。

ところで、平成23年3月11日14時46分に発生した、あの忘れることの出来ない東日本大震災から早2年が経ちました。2万人弱の方が犠牲となり、未だに数千人の行方不明者がいらっしゃいます。そして、30万人強の方々が今なお避難生活を余儀なくされています。放射性物質の除染作業もほとんど手付かずの状況にあり、特に子供への影響や高齢者の健康状態悪化、PTSDを含めた精神面の障害など多方面に亘る健康面の問題から、社会・経済・環境面まで、復旧復興にはほど遠い状況下にあるのが現状です。

そこで2年経った現在、この未曾有の大震災を医師となる皆さんがそれぞれに振り返り、現状を直視し、先ず一人の医学生として何が出来たか、どう行動してきたか、どうあるべきであったかを、もう一度見つめ直してみる良い機会かと思います。そして、これから医師として何ができるか、どう行動すべきかを考えてみて下さい。この大震災で日本に、日本人に、医学生に、医師に投げかけられた課題は極めて大きいはずです。有事における医師としての原点が問われていたものと思います。

震災後、投入された自衛隊派遣総人数は10万人強で、アメリカ軍の支援もありました。世界中からボランティアも多数集まり、被災者への支援を惜しみなく行っていました。ここまでの現実を直視し、現時点で、それぞれの立場、視点から見つめ直しておくことが必要かと思われます。

さて現在、日本も世界も大きな変革期にあるようです。政治、経済、医療、そして人の価値観や生き方まで大きく変わる時代を迎えているような感じが致します。世界は日本の超高齢社会の将来像を注視しており、特に健康立国日本の姿、その見本を世界に示していく必要があります。慶應医学は、その中心になって先導していく責務があります。

2017年の慶應医学創立百年時に竣工予定の新病院棟を中核とした「世界に冠たる慶應医学」を構築するため、今、全ての三四会員の力を結集する必要があります。92回生の皆さんも、その一員として誇りを持ち、大いに活躍してくれることを期待します。

三四会社会功労賞の推薦について

目的　地域社会、社会貢献を通じて顕著な功績により三四会の名誉を高めた三四会員を表彰し実学としての慶應医学の発展を図る。

◎対象
1、表彰目的に沿った優れた業績をあげた三四会正会員（本塾関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域で業績をあげている三四会員も含む）
2、年齢は問わない。

◎推薦方法
1、推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、他大学教授および慶應義塾大学関連病院会会員とします。
2、推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会社会功労賞推薦状）により候補者を推薦してください。
3、締め切りは、平成25年4月23日（火）必着、三四会事務局宛とします。
4、提出部数は、推薦状、被推薦者略歴、表彰目的に沿った業績目録、客観的に評価しうる資料等、ともにコピー10セットが必要です。

※推薦書のダウンロード、必要書類等は下記URLをご覧下さい。

URL：http://www.sanshikai.jp/award/kourousyo/index.html

◎選考並びに受賞
三四会長を委員長とする三四会社会功労賞選考委員会による厳正な選考の結果、原則1名の受賞者を決定します。受章者は平成25年6月15日（土）に予定されている年度第一回評議員会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。

平成25年度 三四会評議員会開催のお知らせ

会則第20条に則り、次のように開催します。

日時：平成25年6月15日
　　午後2時～4時
場所：2号館（新棟）11階　大会議室

本評議員会は総会に代わるもので（会則第18条）、本会の最高意思決定機関です。
評議員各位のご出席をお願いいたします。
なお、閉会後、情報交換会を開催します。

平成25年2月20日
三四会会長　比企 能樹

鑑賞知来

40歳になった頃から、教授などいわゆる「偉い」先生と同席する機会が増えた。その折りに聞いていた質問に、「先生の医者としてのピークはいつでしたか？」というものがあった。ドキドキしながら聞いたものだが、例外なく気持ちよく答えていただいた。若造の失礼な質問に答えてくださった広いお気持ちに感謝するが、先生方にとっても関心のある話題だったのではないかと思う。

興味深かったのは、答えが二つに分かれたことだ。一つは40～50歳くらいという答えで、もう一つは「今も進化し続けている」という回答だ。想像するに、前者は手術などの技量面のことを念頭におき、後者は診断とかマネジメントも含めた総合力と捉えてのお返事だったかと思う。

50歳代の半ばを迎えたわが身を振り返ると、確かに手術時の集中力は以前ほどでない。代わりに危機察知能力が進歩して、泥沼にはまるようなことは少なくなった。同期の医者に聞いても同じような答えが返ってくるし、他業種の同級生も同じようなことを言っていた（ちなみに集中力の低下には老眼が関係している、という声をよく聞く。現在精力的に行われている老視研究をみると、眼科学の進歩が広く中高年の生き方を変えるのではないかと期待する）。

一方で経済界や政界をみると、50歳代などはまだまだ若造である。マネジメントや判断力などは、経験や情報収集能力によるところが大きいからであろう。自分もそういった能力を求められる立場になっていくと想像するが、臨床の現場での緊張感も捨てがたい。「現場重視型」にしても「総合力重視型」にしても、自らのパフォーマンスを判断するのは自分自身でしかないのが、定年のはっきりしない医者の特徴の様である。後輩から「先生のピークは？」と聞かれたらどう答えようかと迷うこの頃である。

（東京歯科大学市川総合病院眼科　教授　島﨑潤　61回）